

## 中東・中央アジア等の鉄鋼業に関する調査研究

### (報告書の概要)

中東・中央アジアの粗鋼生産量は、世界の7%を占める。特に、ウクライナは世界第8位、トルコは世界第11位である。中央アジアには鉄鉱石と石炭が多く埋蔵されており、ウクライナの鉄鉱石埋蔵量は世界最大など豊富であるが低品質な鉱床が多い。

ウクライナの鉄鋼業は、GDPの27%、輸出額の42%を占める国内最大の産業である(2007年)。旧ソ連時代の分業体制の中で、鉄鋼・造船・軍需・穀物生産の各産業基盤が集積していることもあり、鉄鋼に関する国家機関や教育機関など、主要産業を支える仕組みが充実している。ウクライナの鉄鋼業は外需中心であり、ロシアが最大輸出国で、トルコ、中東、欧米などにも輸出している。輸出品目は、鉄鋼の半製品であるスラブやビレットが中心であり、高付加価値化が望まれている。

トルコ工業部門の売上高上位15社のうち、鉄鋼が4社、自動車が5社、家電が2社と鉄鋼のシェアが高く、外資との合弁による製造業の集積が進んでおり、欧州への輸出拠点となっている。

中東・中央アジアの鉄鋼業の魅力としては、ウクライナでは、鉄鋼産業が旧ソ連時代から国家の主力産業であったため、産業基盤となる組織や制度が充実している。特に人材に関しては、優秀な専門人材を多く輩出している。また、欧州市場とロシア市場の中間に位置し、欧州やロシアへのゲートウェイとなりうる地理的優位性を持つ。一方、資本設備は老朽化した設備が多いこともあり、付加価値の低い半製品での輸出が多く、粗鋼生産における生産性や品質水準が低い。トルコの鉄鋼業は、大半が電炉であり、必ずしも高度な技術が蓄積されていない。実際、生産品目も棒材が中心であり、付加価値の高い鋼板などの生産はまだ限られている。

今後の方向性と日本の可能性では、原料・人材・設備面で鉄鋼産業の基礎があるため、中長期的には、海外からの技術や資本導入により、引き続き国の基幹産業として発展していくと考えられる。今後、原料、人材の活用を前提にし、欧州・ロシア向け市場の鉄鋼供給拠点として、IMFによりスリム化した鉄鋼企業との技術提携、省エネ協力、資源確保などを視野に入れることが考えられる。

トルコの鉄鋼業は、UAEでの建設需要の冷え込みの影響を直接受けているが、景気回復を受け、徐々に復活するであろう。欧州・ロシアおよびMENAなどへの供給拠点としての地理的魅力を視野に入れながら、トルコ鉄鋼業の取り組む付加価値向上の取り組みに寄与しつつ連携体制を構築して行くことが考えられる。

### (報告書の主要構成)

- (1) 本調査研究の基本的な考え方
- (2) 中東・中央アジア等の鉄鋼業の動向
- (3) 主要企業の動向
- (4) 新規設備投資、海外企業の参入動向
- (5) 中東・中央アジア等に対する戦略提言